

# ペーパーにならなかったこと

梅原吉廣

昭和35年に北陸病害虫研究会に入会、以来いろいろとお世話になってきた。その中で、心に残してきた2件を述べたい。

## 有機塩素系いもち剤の二次障害

1968年（昭和43年）に全国各地でイネわらを用いた堆肥を使用することにより、野菜や花が奇形を生ずることが判明し、大問題となった。原因はいもち病防除に卓効を有し、全国的に使用されていた有機塩素系殺菌剤、PCBA剤の二次分解物の作用であることが明らかとなった。

それより、4年も前に、金沢市の安原地区の野菜畑で、まず特産の早掘りジャガイモで発症した。安原地区は砂丘を利用した、県内有数の野菜産地で、奇病の発生は関係者を大変、戸惑いさせた。当時、農試の上司に、田村 實氏がおられ、前年に、植物ウイルス研究所に内地研修され、ウイルス病の知識、研究意欲とも人一倍であられ、土壤伝染性ウイルス病ではないかと推測された。その理由は、葉が扇状、葉縁のこぎり状、葉肉厚く、アントシアンの沈着、草丈がやや抑制、さらに、トマト苗やピーマン苗にも発症、また雑草のスベリヒユに見事な症状を呈していたからである。しかも、発症した植物は促成に用いられた温床かその近辺の雑草に限られたことから、赤土が重要なカギを持つと判断された。

土壤伝染性のウイルス病は、我が国ではコムギ縞萎縮病が有名であり、野菜では未発見であったと思う。外国文献などの情報から、ブドウのファンリーフ病に近似し、この媒介は線虫 (*Xiphinema*) である。この辺に当たりをつけ、研究すれば、ドクターものだと語り合った記憶がある。

私は、感度の高い指標植物の選定、土壤や残渣、3液中の存在、作物別の病徴の類別、接木伝播などを分担した。いずれも、ウイルス病と判断出来る結果が得られた。最後に、土壤線虫の関与も考え、土壤殺菌を組入れた試験を実施した。意に反し、殺菌区も発症したのである。大失望したのが思い出される。結論は、その後の調査で、温床の熱源に用いた人糞尿にあるとした。近在の病院から汲み出したことから、この中に含まれる医薬物ではないかと推察し、店じまいした。熱源の生わらに注目しなかったのが今も残念でならない。

## 異臭米

昭和44年、富山県産米において、炊きたてのご飯が、「鳥の羽根をもやしたような」「油臭い」など、異臭を放つ事例が発生し、大きな問題となった。

当時、米の異臭は、貯蔵中に発生した、「かび臭い」か水害などによる長時間冠水による「腐敗臭」などが知られる程であった。

さっそく、農業機械係と病虫係を中心としたプロジェクトチームが組まれた。両係が選ばれた理由は、当時、灯油を熱源とした自動人工乾燥機の導入期で、不完全燃焼によるトラブルが多く、油の残臭が問題となっていた。また、農薬は一般に臭いと言う概念があり、残臭や移り香による場合を想定されたことによる。

化学分析の精度は低く、官能試験にたよらなければならなく、吉川誠次著「食品の官能検査法」を参考に、パネルの規模、パネラーの選定、臭いの判定基準作成など、試行錯誤の中から、富山方式を作り上げた。

試験の結果、いくつかの新知見が得られたが、その中で、病害虫防除に係るものとして、有機燐系いもち剤ESBP剤の出穂後の散布が、異臭米の原因となることが明らかとなった。1年で、ほぼ原因を明らかに出来たことにより、当時、試験場の技術は高く評価された。

この問題は全国的となり、その後の農薬の評価や成分の純度など、登録に係る条件に、大きな貢献をしたと知り、後ろめたい気持ちから前向きに喜んだことが思い出される。